之を要するにその思想は該博にしてその文辭は通達平易なり。然れども該博なれども奥妙ならず、通達なれども深沉ならず、平易なれども痛切ならざるは讀むものをして厭倦の情に堪へざらしむ。必竟是れ理の文にして情の文にあらず、たゞ異言奇事雜出し、當時の迷俗を覺破せし見の往々にして見るべきものあり。また桓譚一輩と比肩して馳するに足る。

（十二）

東漢の諸子王充につきて王符出づ。字は節信、安定臨涇の人なりといふ。少より學を好み志操あり、馬融竇章張衡崔瑗等と友とし善し。安定の俗庶孽を鄙む、而して符外家なし鄉人の賤むところとなる。和安より後ち、世游官を務め、當塗者更に相薦引す。而して符獨り耿介俗に同せず。此を以て遂に昇進を得ず。志意蘊憤、乃ち隱居して書三十餘篇を著し、以て當時の失得を譏る。その名を章顯するを欲せず、故に號して潛夫論といふ。范曄評していふ、その時短を指訐し物情を討謫する、以て當時の風政を觀見するに足ると。而してその貴忠、浮侈、實貢、愛日、述敎の五篇を著錄せり。その務本に於て論述せしところまことに韓非五蠹の亞流なり。

余は今その當時の風敎を痛議せる一節を抄出し、以てその技倆の一斑を示すべし。曰く

夫敎訓者、所以遂道術而崇德義也。今學問之士、好語虛無之事、爭著彫麗之文、以求見異於世。品人群譏、從而高之。此傷道德之實、而惑朦夫之大者也。詩賦者、所以頌善醜之德、洩哀樂之情也。故温雅以廣文與喻以盡意。今賦頌之徒、苟爲饒辨屈蹇之辭、競陳誣罔無然之事、以索見怪於世。愚夫戇士、從而奇之。此悖孩童之思、而長不誠之言者也。夸內孝悌於父母、正操行於閨門、所以烈士也。今多務交游、以結黨助、偷世竊名、以取濟渡。末之徒、從而尙之。此逼眞士之節、而衒世俗之心者也。養生順志、所以爲孝也。今多違志儉養、約生以待終。終沒之後、乃崇飾喪紀、以言孝、盛饌賓旅、以求名。誣善之徒、徒而稱之。此亂孝悌之眞行、而誤後生之痛者也。忠正以事名、信法以理下、所以居官也。今多姦諛以取媚、撓法以便佞。苟得之從而賢之、此滅眞良之行、開亂危之原也。五者外雖有振賢才之虛譽、內有傷道德之至實也。

と。その痛言切言せるところ多くは當世の弊習惡風なり。而して文人學士、清節に驕るものと雖もまたその弊習惡風に染みたるもの當時よく符の指斥を免れ得

しもの果して幾人かある。情激し筆舞ふところ、往々にして風生し雲飛ふの概あり

而してその論述せるところ、皆に一時の失得のみならず、その學根蔕あり、その識卓絶せるものあり。思想界の巨人として裕に王充と抗衡するに足る。また頗る史に通し、篇末古史を述ぶ。その思想は當時の思想界の天を摩し、その眼光は當時の世態人情の地をくゞる。而して激烈なる情熱は遂に發して潛夫論三十篇の文となる。余は當時の文學界に於て獨り王符の胸中別に一明鏡を懸け、筆端別に一鑪鞴を具ふるを多しとす。

後ち度遼將軍皇甫規官を解きて安定に歸る。鄉人貨を以て雁門の太守を得しものあり、亦た職を去て家に還る。書刺して規に謁す。規臥して迎へず。既に入りて問ふ卿さきに郡に在り、雁を食して美かりしかと。頃あり又た白す、王符門に在りと。規もと符の名を聞く、乃ち驚き遽てゝ起き、衣に帶するに及ばず、屣履出で迎へ符の手を援きて還り、與に坐を同くし歡を極む。時人之か爲めに語りて曰く、『徒見二千石、不如一縫掖』と。後世應酬詩賦の掌故となす。符竟に仕へずして家に終る。

昔人いへるあり、曰く、それ和平の音は淡薄にして愁思の聲は要妙なり。謹愉の辭は工なりかたくして窮苦の言は好なり易しと。豈たゞ人にのみ然りといはんや、世にも亦た然るものあり。治平の極、亂離人生を聊ぜざるの時に至りて言辭文章燦然としてみるべきものあるとこれが爲めのみ。余は周末に於て之を見たり、今また漢季に於て再び之を見んとす。

蓋し三代の蘊蓄は周末に至りて發して諸子の文學となれり。光武より數世好學の君上に在り、大に學藝を奬勵せし結果は既に班張等の文豪を輩出せしめてその泰平を粉飾せしめぬ。外戚宦官權を專にし、海内遂に動亂するに及ひて愁思の聲、窮苦の言、靡然として興る。たゞ儒に一なる當時の人心は周末に於けるか如き多樣異色の文學なからしめ、また湛深幽玄の理想なからしめしと雖も、清節身を持するの士、姦惡凶暴に觸れて鏘然戛然、金玉の音を發せしものまた少なからす。後漢文學の通弊益々甚しきを加へしと雖も英靈の氣その間に鬱勃たるものあるは蓋ふ可からず。

漢末の文豪之を前にして禁邕あり。之を後にして孔融あり。その位置、文思皆な一世を風動するに足れり。邕字を伯喈といひ陳留圉の人なり。その父祖皆な清白の行あり。邕性篤孝、母の病に持し寒暑節變にあらざれは未た嘗て襟帶を解かず、寢寐せざりしもの七旬に及へりといふ。また叔父從弟と同居し、三世財を分たず、鄉黨その義を高とす。少うして博學なり。太傅胡廣に師事して辭章數術天文を好み妙に音律を操る。間居古を翫ひ當世と交らず、東方朔の客難、及ひ楊雄班固崔駰の徒の疑を設けて自ら通するに感し、乃ち群言を斟酌してその是を是とし而してその非を矯め、釋誨を作り、以て戒厲す。その結末歌を繫けて

練余心兮浸太清、滌穢濁兮存正靈、和液暢兮神氣寧、情志泊兮心亨亨、
嗜欲息兮無由生、蹕宇宙而遺俗兮、眇翩翩而獨征

といふ。然ともその初を守る能はす、建寧三年、司徒橋玄の府に辟さる。玄甚だ之を敬待す。出て〻河平の長に補せられ、召されて郎中に拜せられ、書を東觀に校す。議郎に遷る。邕以ふ、經籍聖を去る久遠、文字謬多し、俗儒穿鑿して後學を疑誤すと。嘉平四年乃ち諸儒と奏して六經の文字を正定せんことを求む。靈帝之を許す。邕乃ち自ら碑に書し工をして鐫刻せしめ、太學門外に立つ。是に於て後儒晩學咸な正を取る。碑始めて立つに及ひてその觀視し及ひ摹寫するもの車乘日に千餘兩、街陌に塡塞す。時に數々災異あり邕時事をいひ頗る不法の臣を劾す。遂に怨者の爲めに陷られ、家屬と髡鉢して朔方に徙され、五原安陽縣に居る。邕前に東觀に在り、盧植韓説等と後漢記を撰補す。會々事に遭ひ流離し、成を得るに及はす、因て上書して自らその著せしところの十意を陳奏す。十意は猶は前漢書十書のごときなり。尋て大赦にあひ、乃ち本郡に還るを宥され將に還路に就かんとす。五原の大守之を餞す。邕之を輕んず。怒て朝廷を謗訕すと密告す。邕卒に免れざるを慮り、乃ち江海に亡命し、吳會に遠跡す。傳者いふ、邕の吳に在るや、吳人桐を燒きて以て爨ぐものあり、邕火烈の聲をきゝその良木なることを知り、因て請うて裁りて琴を爲くる。果して美音あり。而してその尾猶は焦けたり。故に時人名つけて焦尾琴といふ。又たいふ、初め邕の陳留に在りしや、その隣人酒色を以て邕を召すものあり。往きし比ひにして主以て酣ふ。客の琴を屏に彈するあり。邕門に至りて試に潛に之を聽きて曰く、愔、樂を以て我を召し、而して殺心あるは何

ぞやと。遂に反る。命を將ゆるものの主人に告げて曰く、蔡君向に來り、門に至て去ると。邕もと邦鄉の宗とするところとなる。主人、遽に自ら追ふてその故を問ふ、邕具に以て告ぐ。怪まざるものなし。琴を彈せしもの曰く、我向に琴を鼓す、螳蜋方に鳴蟬に向ふ。蟬將に去らんとして未た飛はす。螳蜋之か爲に一前一卻するを見き。吾心聳然たゝ螳蜋の之を失はんことを恐れき。これ豈殺心となりて聲に形れしものかと。邕莞然として笑ふて曰く、此以て之に當つるに足らんと。中永六年靈帝崩し、董卓司空となる邕の名の高を聞きて之を辟す、邕已むを得すして到り、甚た敬重せらる。屢々官を轉し初平元年中郎將に拜す。卓邕の才を重んじ厚く相遇待す。集讌あることに輙ち邕をして琴を鼓し事を賛けしむ。邕もまた心を匡益に存す。然とも卓多く自ら限用し、邕その言の從はるゝ少なきを恨む。遂にその濟しかたきを想ひ遯逃せんと欲せしも能はすして止む。卓誅せらるゝに及び、邕司徒王允の坐にあり、歎、色に動くあり。允勃然之を叱して曰く、董卓は國の大賊なり、幾と漢室を傾けんとす、君、王臣となり宜しく同しく忿るへきところ、而してその私遇を懷ひ、以て大節を忘る。今天有罪を誅す。而して反て相傷痛す。豈共に逆をなさゝらんやと。即ち收へて廷尉に付し罪を治めしむ。邕陳辭謝して黥首刖足、漢史を經成せんと乞ふ、士大夫多く之を矜救す。得る能はす。大尉馬日磾馳せ往きて允に謂て曰く、伯喈は曠世の逸才、多く漢事を識る。當に後史を續成せしめ一代の大典と爲すへし。且つ忠孝素と著し、而して坐するところ名なし。之を誅せはむしろ人望を失はんかと。允曰く、昔は武帝司馬遷を殺さす、謗書を作らしめ後世に流る。方今國祚中ころ衰へ、神器固からす。佞臣をして筆を執りて幼主の左右に在らしむ可らす。既に聖德に益なし、復た吾黨をしてその訕議を縈らしむと。月磾退て人に告けて曰く、王公それ長世ならさらんか。善人は國の紀なり。制作は國の典なり。紀を滅し典を廢しそれ能く久からんやと。邕遂に獄中に死す。時年六十一、搢紳諸儒流悼せさるなし。北海鄭玄聞きて歎して曰く、漢世の事誰と與に之を正さんと。兗州陳留の間、皆な像を畫きて頌す。その漢事を撰集する、未た錄して以て後史を繼くを見す。適々靈紀及ひ十意を作り、又た諸列傳四十二篇を補ふ。李傕の亂に因り漂沒して多くは存せす。著せしところ詩、賦、碑、誄、銘、讃、連、殊、箴、弔、議、論獨斷、勸學、釋誨、叙樂、女訓、篆勢、祝文章表、書記、范曄いふ、凡そ百

四篇、世に傳はると。今存するもの詩四篇賦十八篇疏四篇、表十篇書七篇、論五篇、議六篇、對問二篇、設論二篇、連珠一篇、頌九篇、贊三篇、箴一篇、銘十篇、碑三十五篇、誄表二篇、誄、神誥、哀讃各一篇、祝辭五篇、弔一篇、その他篆勢隸勢等三篇、獨斷單行す。

（十三）

蔡邕の最も長せしところは銘と墓碑なり。銘につきては劉勰いふ、邕の銘思獨りころ蔡邕より高きはなしと。而してその事を叙するや該にして要、その采を綴るや稚にして澤、清詞轉して躬らす、巧義出でゝ卓立す。その才たるを察するに自然にして至る』と贊し、その揚賜の碑文を評して『骨鯁訓典』といひ、陳郭二碑文を評して『詞無擇言』といひ、衆碑に周ねく清允にあらさるなしといふ。げにや邕か揚賜の爲めに碑を作りしと三、漢太尉揚公碑、文烈侯揚公碑、司空文烈侯揚公碑是なり。而して叙事各々別なり。その才人より高きと遠き者に非すんは何そ能く此の如きを得んや。余は今陳太丘碑を擧げ邕の碑文の如何なる者なるを示すべし、曰く

先生諱寔、字仲弓、潁川許人也。含元精之和、應期運之數。象資九德、總脩百行。於鄉黨則恂恂焉、彬彬焉。善誘善導、仁而愛人、使夫少長咸安懷之。其爲道也、用行舍藏、進退可度。不徼評以干時、不遷怒以臨下。四爲郡功曹、五辟豫州。六辟三府、再辟大將軍。宰聞喜半歲、太丘一年。德務中庸、教敦不肅。政以禮成、化行有謚。會遭黨事、禁錮二十年。樂天知命、澹然自逸。交不諂上、愛不瀆下。見機而作、不俟終日。及文書赦宥、時年已七十。遂隱丘山、懸車告老。四門備禮。閑心靜居。大將軍何公、司徒袁公、前後招辟。使人曉喻云欲特表、便便可入踐掌伯超補三事、紆佩金紫、光國雖勤。先生曰、絕望尺久、飾巾待期而已。曾遂不至。弘農揚公、東海陳公、每在衰職、群寮賀之。皆舉手曰、潁川群陳君、絕世超倫。大位未躋、慙於文仲竊位之負。故時人高其德、重乎公相之位也。年八十有三、中平三年八月丙午、遭疾而終。臨沒顧命、留葬所卒。時服素棺、槨財周棺。喪事唯約、用過乎儉。群公百僚、莫不咨嗟。嚴薇知名、失聲揮涕。大將軍弔祠、錫以嘉謚、曰徵士陳君、稟岳瀆之精、苞經曜之純。天不憖遺老、俾屏我王。梁崩哲萎、于時靡憲。搢紳儒林、論德謀跡、謚曰文範先生。傳曰、郁郁乎文哉。書曰、洪範九疇、彝倫攸叙。文爲德表、範爲士則。存誨沒號、不亦宜乎。三公遣令史、祭以中牢、刺史敬弔。太守南陽曹府君、命官作誄曰、赫矣陳君、命世是生。含光醇德、爲士作程。資始既正、守終又令。奉禮終沒、休矣清聲。遣官屬掾吏、前後赴會。刊石作銘、府亟

與此縣會葬。荀慈明、韓元長等、五百餘人、總麻設位、哀以送之。遠近會葬、于人已上、河南尹神府君臨郡、追歎功德、述錄高行、以爲遠近鮮能及之。重部大掾、以成時銘。斯可謂存榮沒哀、死而不朽者已。乃作銘曰、

峩峩崇嶽、吐符降神。於皇先生、抱寶懷珍。如何昊穹、既喪斯文。
微言圮絕、來者曷聞。交交黃鳥、爰集于棘。命不可贖、哀何有極。

と。是れ豈事を敘するや該にして要、采を綴るや雅にして澤、清詞轉して窮らす、巧義出て丶卓出せるものにあらずや。孔融邕を慕ふ、其の張陳兩文、辨給采るに足る、またその亞なり。後世墓碑の躰大抵邕に倣ひてその正躰となせり。

邕の詩今に存するもの四篇、飲馬長城窟行、答對元式詩、答卜元嗣詩、翠烏詩是なり。うち最も飲馬長城窟行を推す、樂府は單に古辭といへり。たゞ玉臺新咏、蔡邕の作となし樂府古題要解『或はいふ蔡邕の詞なりと』いへり、曰く

青青河畔草、縣縣思遠道。遠道不可思、夙昔夢見之。夢見在我傍、
忽覺在他鄉。他鄉各異縣、展轉不可見。枯桑知天風、海水知天寒。
入門各自媚、誰肯相爲言。客從遠方來、遺我雙鯉魚。呼童烹鯉魚、
中有尺素書。長跪讀素書、書中意何如。五有加餐食、下有長相思、

と。情思纏綿、若果して邕の作とせばその詩、才また群を拔くものと謂はさる可からす。今知る可からさるのみ、その翠烏詩また誦すへし、

（十四）

蔡邕女あり名は琰字は文姬（或はいふ昭姬）博學にして才辨あり。又音律に妙なり。河東衞中道に適く、夫亡して子なし、家に歸寧す。興平中天下喪亂す、文姬胡騎に獲られ、南匈奴太賢王に沒し胡中に在る十二年、二子を生む。曹操もと邕と善し、その嗣なきを痛み、即ち使者を遣り金璧を以て之を贖ふ。而して重ねて同郡の董祀に嫁す。祀屯田都尉となり、法を犯して當に死すへし。文姬曹操に詣りて之を請ふ。時に公卿名士及び遠方使驛、坐するもの堂に滿つ。操賓客に謂て曰く、蔡伯喈の女外に在り、諸君の爲に之を見せしめんと。文姬進むに及ひて蓬首徒行、叩頭して罪を請ふ。音辭清辨、旨甚た酸哀なり。衆皆な爲めに容を改む。操曰く誠實相矜む。然とも文狀已に去る、奈何せんと。文姬曰く、明公廐馬萬匹、虎士林をなす。何そ疾足一騎を惜み垂死の命を濟はさるやと。操その言に感して乃ち祀の罪を追原す。

旦に旦寒、賜ふに頭巾履襪を以てす。操因て問うて曰く、聞く夫人の家、先に墳籍多かりしと。猶ほ能く之を憶識するや否やと。文姫曰く昔亡父書を賜ひしこと四千許卷、塗炭に流離し存するものあるなし。今誦憶するところ裁に四百餘篇のみと。操曰く、今當に十吏を使し夫人に就て之を寫さしむへしと、文姫曰く、妾聞く男女の別、禮親授せず。乞ふ紙筆を給へ。眞草唯々命のまゝにせんと。是に於て繕書して之を送る。文遺誤なし。後亂離に感傷し、追懷悲憤して詩二章を作る。五言及び七言共に意を同しくす。文選載せず、故に長きを厭はすこゝにその五言一章を之を擧くへし。

漢季失權柄、董卓亂天常。志歌圖篡弑、先害諸賢良。逼迫遷舊邦、擁主以自彊。海內興義師、欲共討不祥。卓衆來東下、金甲耀日光。平土人脆弱、來兵皆胡羌、獵野圍城邑、所向悉破亡。斬截無子遺、尸骸相掌拒。馬邊懸男頭、馬後載婦女。長驅西入關、還顧邈冥冥、肝脾爲爛腐。所略有萬計、不得令屯聚。或有骨肉俱、欲言不敢語。失意機微間、輒言斃降虜。要當以亭刃、我曹不活汝。豈復惜性命、不堪其詈罵。或便加棰杖、毒痛參并下。且則號泣行、夜則悲吟坐。欲死不能得、欲生無一可。彼蒼者何辜、乃遭此危禍。邊荒與華異、人俗少義理。處所多霜雪、胡風春夏起。翩翩吹我衣。肅肅入我耳。感時念父母、哀歎無窮已。有客從外來、聞之常歡喜。迎問其消息、輒復非鄉里。邂逅徼時願、骨肉來迎己。己得自解免、當復棄兒子。天屬綴人心、念別無會期。存亡永乖隔、不忍與之辭。兒前抱我頸、問我欲何之。人言母當去、豈復有還時。阿母常仁惻、今何更不慈。我尙未成人、奈何不顧思。見此崩五內、恍惚生狂癡。號泣手撫摩、當發復回疑。兼有同時輩、相送告離別。慕我獨得歸、哀叫聲摧裂。馬爲立踟躕、車爲不轉轍。觀者皆歔欷、行路亦嗚咽。去去割情戀、遄征日遐邁。悠悠三千里、何時復交會。念我出腹子、匈臆爲摧敗。既至家人盡、又復無中外。城郭爲山林、庭宇生荊艾。白骨不知誰、縱橫莫覆蓋。出門無人聲、豺狼號且吠。煢煢對孤影、怛咤糜肝肺。登高遠眺望、魂神忽飛逝。奄若壽命盡、旁人相寬大。

爲復彊視息、雖生何聊賴。託命於新人、竭心自勗厲。流離成部賤、濁恐復指廢。人生幾何時、懷憂終年歲。

と。逢遭已に奇文辭また贈、自己の實歷を述へて語語肺肝より出つ。その間婦人消魂の狀目睹るか如く、愛子に別る一節嗚咽讀むに堪へす。

後漢末の詩としてなほ注目すへきものは秦嘉かその婦に贈りその婦徐淑か別を叙せしものと是なり。嘉字は子會、隴西の人なり、上郡の掾となりしといふ。鐘崎その詩品に於て之を第二に列し、さて曰く、夫妻事既に傷むへし。文も亦た悽怨。五言を爲くりしもの數家にすぎす、而して婦人二に居る(一は即ち班婕妤)徐淑別の作、團扇に次くと、而して後漢に於ける詩の發達は遂に建安中爲焦卿妻作の一大長篇世に出つるに至れり。この詩の序によれは曰く、漢末建安中、廬江府の小吏焦仲卿の妻劉氏、仲卿の母の遣るところとなる。自ら誓ひて嫁せす。その家之に逼る乃ち水に投して死す。仲卿之をきゝ亦た自ら庭樹に縊る。時人之を傷みて詩を作くるといふ。蓋し漢代文學の中堅は韻文に於ては辭賦なり、散文に於ては史傳策書なり。而して後漢に於て詩漸く盛に魏晉に至りて益々その勢を逞しくし、唐に至りて大成の軍に向ひぬ。是れまた人心漸く內に向ひ辭賦の徒らに外形の美と壯とに滿足する能はさるに至りしに因らすんはあらす。想ふに老莊の思想の復興の結果ならんか。

(十五)

蔡邕と前後して文藻詩思あるもの頗ぶる多し。哀吟悲歌、頗る人を動かすに足るものあり。當時漢陽西縣の人に趙壹字は元叔なるものあり。體貌魁梧、美須豪眉、之を望めは甚た偉なり。而して才を恃みて倨傲なり、鄉黨の擯くるところとなる。後屢々罪に抵り幾と死に至らんとす。友人救うて免るゝを得たり。壹廼ち書を貽り恩を謝し窮鳥の賦一篇を爲くる。その辭に曰く、

有一窮鳥、戢翼原野。畢網加上、機穽在下。前見蒼隼、後見驅者。繳彈張右、羿子彀左。飛丸激矢、交集于我。思飛不得、欲鳴不可。舉頭畏觸、搖足恐墮。內獨怖急、乍冰乍火。幸賴大賢、我矜我憐。昔濟我南、今振我西。鳥也雖頑、猶識密恩。內以書心、外用告天。天乎祚賢、歸賢永年。且公且侯、子子孫孫。

と。又た刺世疾邪賦を作り、以てその怨憤を舒ぶ。曰く、

伊五帝之不同禮、三王亦又不同樂。數極自然變化、非是故相反駮。德政不能敎世混亂、賞罰豈足懲時清濁、春秋時禍敗之始、戰國愈復增其荼毒。秦漢無以相踰越、廼更加其怨酷。寧計生民之命、唯利己而自足。于茲迄今情僞萬方。佞諂日熾、剛克消亡。祇痔結駟、正色徒行。嫗媽名勢、撫拍豪强。偃蹇反俗、立致咎殃。捷懾逐物、日富月昌。渾然同惑、就溫就涼。邦夫顯達直士幽藏。原斯瘼之幽興、實執政之匪賢。女謁掩其視聽兮、近習秉其威權。所好則鎖皮出毛羽、所惡則洗垢求其瘢痕。雖欲竭誠而盡忠、路絶險而靡緣。九重既不可啓、又群吠之狺狺。安危亡於旦夕、肆嗜欲於目前。奚異涉海之失柂、積薪而待燃。榮納由於閃楡。就如辨其蚩妍。故法禁屈撓於勢族、恩澤不逮於單門。寧飢寒於堯舜之荒歲兮、不飽暖於當今之豐年。乘理雖死而非亡、違義雖生而匪存。有秦客者、迺爲詩曰、

河清不可俟、人命不可延。順風激靡草、富貴者稱賢。文籍雖滿腹、不如一囊錢。伊優北堂上、抗髒倚門邊。

魯生聞此辭、繫而作歌曰、

勢家多所宜、咳唾自成珠。被褐懷金玉、蘭蕙化爲芻。賢者雖獨悟、所因在群愚。且各守爾分、勿復空馳驅。哀哉復哀哉、此是命矣夫、

と。當時衰亂の俗睹るか如し。文理暢達また多しとすへし。而して遂に偃蹇俗に反し、袁逢羊陟の徒之を奇とし一時聲名京師を動かしゝと雖も、不遇才を延はさすして終ふ。范曄いふ、賦頌箴誄書論及ひ雜文十六篇を著すと。上に擧くるところ以てその才思の一班を伺ふへきか。

後世、その詩才を以て趙壹と、同列に論するもの、當時なほ鄙炎あり。字を文勝といふ。范陽の人にして、鄙食其の後なりといふ。藻思ありまた音律を解す。言論給捷多くその能理に服す。靈帝の時州郡の辭命皆な就かす。志氣あり、詩二篇を作くる。曰く、

大道夷且長、窘路狹且促。修翼無卑栖、遠趾不步局。舒吾陵霄羽、
奮此千里足。超遙絶塵驅、倏忽誰能逐。賢愚豈常類、稟性在清濁。
富貴有人籍、貧賤無天錄。通塞苟由己、志士不相卜。陳平敖里社、
韓信釣河曲。終居天下宰、食此萬鍾祿。德音流千載、功名重山岳。
靈芝生河洲、動搖因洪波。蘭榮一何晚、嚴霜瘁其柯。哀哉二芳草、
不植太山阿。文質道所貴、遭時用有嘉。絳灌臨衡宰、誚誼崇浮華。

賢才抑不用、遠投荆南沙。抱玉東龍驥、不逢樂與和　安得孔仲尼、
爲世陳四科、

と、後ち妻家の爲めに訟られ、嘉平十六年、遂に獄中に死す。時に年二十八なりといふ。鐘嶸その詩品に於て班固及ひ趙壹と之を併論して曰く、孟堅才流れて掌故に老ゆ。その詠史を觀るに感歎の詞あり。文勝(炎)靈芝を詠するに託し、懷寄淺からす。元叔(壹)憤を蘭蕙に散し、褒錢を指斥し、苦言切句、頁に亦た勤めたり。斯人にして斯困あり、悲かなと。その詩思藻才、壹と炎と又た劉梁あり、世の多くは利を以て交り、邪曲を以て相黨するとを疾み、廼ち破群論を著し、また辨和同の論を著す。破群論亡し、たゝ辨和同の論存す。識見愛すへし。又た高彪あり、人の督軍御史となり幽州を督するものを送るの箴あり蔡邕等甚たその文を美とし、以て尙ふるなしとなせり。また侯瑾あり、驕世論を作りて當世を譏切し、山中に隱れ、應賓難を作りて自から寄す。また張超あり、文才あり草書を善くすと傳ふ。然とも當時文才識見、最も漢季の文學を代表するに足るへきものは魯國の男兒孔融その人なりとす。

孔融字は文擧、魯國の人、孔子廿世の孫なり。幼にして異才あり。年十歲のとき父に隨ひて京師に詣る。時に河南の尹李膺簡重を以て自ら居り、妄りに士に接せす。賓客外に敕らく、自ら當世の名人及ひ通家にあらされは皆な白するを得す。融其人を觀んと欲す、故に膺の門に造り門者に語て曰く、我は是れ李君通家の子弟なりと。門者之を言ふ。膺融に請ひ問ふて曰く、高明祖父嘗て僕と恩舊有かと。融曰く然り、先君孔子、君の先人李老君と德を同しくし義を比し而して相師友とす、則ち融君と累世の通家なりと。衆歎息せさるなし。太中大夫陳煒後れて至る。坐中以て煒に告く。煒曰く夫れ人小にして聰了なるも大にして未た必すしも奇ならずと。融聲に應して曰く、君の言ふ所を見れは、將に早慧ならさりしならんと。膺大に笑ふて曰はく高明必ず偉器たらんと。年十三、父を喪ひ哀悴過毀扶けて後ち起つ。州里その孝に歸す。性學を好み博渉多く該覽す。山陽の張儉中常侍侯覽の怨むところとなる。覽州郡に告けて儉を捕へしむ。儉融の兄褒と舊あり。亡けて褒に抵る、遇はず。時に融年十六、儉之を少として告けず。融その窘色あるを見て謂て曰く、兄外に在りと雖とも吾獨り君の主たる能はざるかと。因て留めて

之を舍す。後ち事泄る。國相以下密に就て掩捕す。儉脫し去るを得たり。遂に融を幷收し獄に送る。二人また坐すところを知らず。融曰く。保納舍藏せしものは融なり、當に之れに坐すべしと。褒曰く。彼來りて我に求む弟の過にあらず、請ふその罪に甘せんと。吏その母に問ふ、曰く、家事長に任ず。妾その辜に當らしと。一門死を爭ふ、郡縣疑うて決する能ず。乃ち之を上請す。詔書竟に褒を坐せしむ。融是より名を顯す。州郡の禮命、皆な就かず。司徒楊賜の府に辟さる。時に隱に官僚の貪濁なる者を覈し、將に貶黜を加へんとす。融多く中官の親族を擧ぐ。尙書內寵に迫るを畏れ、椽屬を召して之を詰責す。融罪惡を陳對し、言阿曲なし。河南の尹何進遷りて大將軍となるに當て揚賜融を遣り奉謁賀せしむ。進時にして通せず。融即ち謁を奪ひ府に還り劾を投じて去る。河南の官屬之を耻ぢ、私に劍客を遣りて追ふて融を殺さしむ。客進に言あり、曰く、孔文擧重名あり。將軍若し怨を此人に造らは則ち四方の士領を引きて去らん、如かず因て之を禮し、以て廣を天下に示すべきにはと進之を然りとし、融を辟して侍御史となす。後ち虎賁中郎將となる。會、董卓、廢立す。融因て對答することに輙ち匡正の言あり。以て卓の旨に忤ひ、轉して議郎となさる。時に黃巾數州に寇す。而して北海最も賊衝となる。卓乃ち所司に諷し、融を擧けて北海の相となさしむ。融郡に到り、士民を收合し、兵を起し、武を講し、檄を馳せ、翰を飛ばし、引きて州に謀る。群賊二十萬衆、冀州より還る。融逆へ擊てその敗るるところとなる。乃ち散兵を收め、朱虛縣を保ち、稍復た吏民の黃巾に誤られしもの男女四萬餘人を鳩集し、更に城邑を置き、學校を立て、儒術を表顯し、賢良鄭玄等を薦擧し、一介の善と雖も禮を加へさるなし。郡人の後なきもの、及び四方の游士にして死亡するもの、皆な棺具を爲りて之を斂葬す。ときに黃巾復來たりて侵暴す、融出て丶都昌に屯す。賊の爲めに圍まる、遑急なり。乃ち救を平原の相劉備に求む。備驚て曰く、孔北海乃ち復た天下に劉備あるを知るかと。即ち兵三千を遣り之を救ふ。賊乃ち散走す。時に袁氏曹氏方に盛なり、融紹と操との終に漢室を圖るを知る。その高氣を負ひ志請難小なりと雖も、而も才疎に意廣く、竟に功を成すなし、郡に在ること六年、劉備表して靑州の刺史を領せしむ。建安元年袁譚に攻められ、春より夏に至る。戰士餘すところ裁かに數百人。流矢雨集し、戈矛內接す。融几に隱り書を讀み談笑自若たり。城夜陷る

る、乃ち東山に奔る。妻子譚に虜にせらる。獻帝許都するに及びて融を徵して少府となす。毎朝訪對に會ふことに融輙ち正を引き議を定む。公卿大夫皆な名を隷するのみ。

初め太傅馬日磾山東に奉使す。淮南に至るに及びて數々袁術に意あり。術之を輕侮す。遂にその節を奪取す。去るを求めて又聽かれず。因て逼て軍帥となさんと欲す。日磾深く自ら恨み、遂に血を嘔て斃る。喪還るに及びて朝廷議して禮を加へんと欲す。融乃ち獨り議して以爲らく昔は國佐晉軍に當て撓まず、宜僚自刃に臨みて色を正しくす。王室の大臣豈脅されしを以て辭をなすを得んや。聖上舊臣を哀矜し、未た追案に忍びず、宜しく禮を加ふべからずと。朝廷之に從ふ。

時に論者多く肉形を復せんと欲す。融乃ち建議して曰く、

古者敦厖、善惡不別。吏端形清、政無過失。百姓有罪、皆自取之。末世陵遲、風化壞亂。政撓其俗、法害其人。故曰、上失其道、民散久矣。而欲繩之以古刑、投之以爰棄、非所謂與時消息者也。紂斫朝涉之脛、天下謂爲無道。夫九牧之地、千八百君。若各刖一人、是下常有千八百紂也。求俗休和、弗可得已。且殺刑之人、慮不念生、志在思死、類多趨惡、莫復歸正。夙沙亂齊、伊戾禍宋。趙高英布、爲世大患、不能止人遂爲非也。適足絶人還爲善耳。雖忠如關龍逢、信如卞和、智如孫臏、寃如巷伯、才如史遷、達如子政、一離刀鋸、沒世不齒。是太甲之思庸穆公之霸秦、南雎之骨立、衞武之初筵、陳湯之都賴、魏尙之守邊、無所復施也。漢開改要之路、凡爲此也。故明德之君、遠度深惟、棄短就長、不尙革其政者也。

と。朝廷之を善とし、卒に改めず。この篇、融の文の最も可なるもの、能くその長を發揮し、また能くその短を發揮す。その多く故事を疊めるは漢代の風なり。否なら先秦に於て既にその萠芽を見る

（十六）

融の獻替章奏せし所なほ多し、今一一之を擧げざるのみたゞこゝに注意せざる可らざるものはその曹操に於ける關係なり。融年に於て曹操より大なる二歲、家世聲華又遙に之にすぐ。而して心その姦を知る、操また之を害とす。初め操の攻めて鄴城を屠るや、袁氏の婦子、多く侵畧せらる、而して操の子、丕私に袁熙（紹の子）の妻郭氏を納る。融乃ち操に書を與へて稱す、武王紂を伐ち、妲己を以て周公に賜ふと。操悟らず、後ち問ふ、何の經典に出づと。對へて曰く、今を以て之を度れば想ふに當に然

る可きのみと。後ち操烏担を討つ。又た之を嘲りて曰く、大將軍遠く征し海外を蕭條す。昔肅愼楛失を責せず、丁零蘇武の牛羊を盜む、幷せて案すべきなりと。時に年飢へ兵興る、操表して酒禁を制す。融頻りに之を爭ふ、侮慢嘲弄の辭多し。その第一書に曰く

酒之爲德久矣。古先哲王、類帝禋宗、和神定人、以濟萬國、非酒莫以也。故天垂酒星之燿、地列酒泉之郡、人著旨酒之德。堯不千鍾、無以建大平。孔非百觚、無以堪上聖。樊噲解巵鴻門。非家肩鐘酒、無以奮其怒。趙之厮養、東迎其王。非引卮酒、無以激其氣。高祖非醉斬白蛇、無以暢其靈。景帝非醉幸唐姬、無以開中興。袁盎非醇膠之力、無以脫其命。定國不酣飲一斛、無以決其法。故鄙生以高陽酒徒、著切於漢。屈原不餔糟歠醨、取困於楚。申是歡之、酒何負於政哉。

と。その第二書に至りては嘲弄の極、眼中また曹操なきなり。曰く、

昨承訓答、陳二代之禍及衆人之敗以酒亡者、實如來誨。雖然徐偃王行仁義而亡、今令不絕仁義。燕噲以讓失社稷、今令不禁謙退。魯困儒而損、今令不變文學。夏商亦以婦人失天下、今令不斷婚姻。而將酒獨急者疑但惜穀耳。非以亡年爲戒也

と。融既に操の雄詐漸く著るを見て數〻堪ふる能はず。故に辭を發する偏宕、多く乖忤を致せり。又た嘗て奏す、宜しく古の王義の制千里寰內以て諸侯を封建せざるに準ず可しと。操その論建する所漸く廣きを疑ひ、益〻之を憚る。然とも融の名天下に重きを以て外相容忍、而して潛に正議を忌み、大業を沮するを慮る。山陽の鄒慮字は鴻豫といふ。もと融と隙あり。是に於て風旨を微望し、承法を以て奏して融の官を免じ、因て顯に讎怨を明にす。操故に書を以て融を激厲して曰く、

蓋聞唐虞之朝有克讓之臣、故麟鳳來而頌聲作也。後世德薄、猶有殺烏爲君、破家爲國。至其敝、睚眦之怨必讎、一餐之專必報、故鼂錯念國、遘禍於袁盎。屈平悼、楚受譖於椒蘭。彭寵傾亂、起自朱浮。鄧禹威損失於宗馮。由此言之、喜怒怨愛、禍福所因。可不愼與。昔廉藺小國之臣、猶能相下。寇賈倉卒武夫、屈節崇好光武不問。伯升之怨。齊侯不疑射鈎之虞。夫立大操者、豈累細故哉。往聞二君有執法之平、以爲小介。當收舊好、而怨毒漸積、志相危害。聞之憮然、中夜而起。昔國家東遷、文學盛歎、鴻豫名更相副、綜達經學、出於鄭玄、又明司馬法。鴻豫亦稱文學奇逸博聞。誠怪今者與始相違。孤與文學既非舊好、又於鴻豫亦無恩紀。然願人之相美、不樂人之相傷。是以區區思協觀好、又知二君、群小所搆孤

爲人臣、進不能風化海內、退不能建德和人。然撫養戰士、殺身爲國。破浮華交會之徒、計有餘矣。

と。融の高志、直情なる、何ぞかゝる無禮の言に忍ばんや、況んやその每に姦視せる操の言なるをや。融報じて曰く、

猥惠書敎、告所不逮。融與鴻豫州里、此隣知之最早。雖嘗陳其功美、欲以厚於見私、信於爲國、不求其覆過掩惡、有罪望不坐也。前者黜退、懽欣交之。昔趙宣子朝登韓厥、夕被其戮、喜而求賀。況無彼人之功、而敢枉當官之平哉。忠非三閭、智非鼂錯。竊位爲過、免罪爲幸。乃使餘論遠聞、所以慙懼也。朱彭寇賈、爲世壯士。愛惡相攻、能爲國患。至於輕弱薄劣、猶昆虫之。相囓適足還害其身、誠無所至也。晉侯嘉其臣所爭者大、而師曠以爲不如心競、性既遲緩、與人無傷。雖出胯下之負、揄次之辱、不知貶毀之於已。猶蚊虻之一過也。子產謂人心不相似。或矜執者、欲以取勝爲榮、不念宋人待四海之客、大鑪不欲令酒酸也。至於屈穀巨瓠堅而無聚、當以無用罪之耳。它者奉遵嚴敎、不敢失墜。都爲故吏、融所推進。趙衰之技、卻穀不輕公叔之升。臣也。知同其愛、訓誨發中、雖懿伯之忌、猶不能念。況恃舊交、而欲自外於賢吏哉。輙布腹心、修好如初。苦言至意、終身誦之。

と。歲餘復た太中大夫に拜す。曹操既に嫌忌を積む。而して鄰慮またその罪を構成す。遂に人をして、枉狀、融を奏せしめて曰く、少府孔融、昔北海にあり。王室靜ならざるを見て徒衆を招き不軌を規らんと欲し、いふ、我は大聖の後にして宋に滅せらる。天下を有たんもの何ぞ必すしも卯金刀のみならんと。孫權の使と語り朝廷を謗訕す。又た融九列となり、朝儀に遵せず、禿巾微行して宮掖に唐突す。又た前に白衣稱衡と跌蕩放言して、いふ、人の子に於ける當に何の親かあるべき。その本意を論ずれば實に情發欲するが爲めのみ。子の母に於ける、亦た復た奚ぞ爲さん、譬へば物を瓶中に寄するが如し。出づれば則ち離れんと。既にして衡と更に相贊揚す。衡融に謂て曰く仲尼不死と、融答へて曰く、顏回復生と。大逆不道宜しく重誅を極むへしと。書奏す。獄に下され棄市せらる。時に年五十六、妻子皆な誅せらる、時に建安十三年なり。初め女年七歲男年九歲その幼弱なるを以て全を得たり。它舍に寄る。二子方に棊樗す。融收られて動かず左右曰く、父執られて、起たざるは何ぞやと。答へて曰く、安ぞ巢毀れて卵破れざるを得んやと。主人肉汁を遺せるあり、男渴して之を飲む。女曰く、今日の禍、豈久しく活くるを得ん、何に

賴りて肉の味を知らんと。兄號泣して止む。或は曹操に言ふ遂に盡く之を殺す。收はれて至るに及び、兄に謂て曰く、若し死者知るあらば、父母を見るを得ん、豈至願にあらずやと。乃ち頸を延べて刑に就き、顏色變せず、之を傷まざるなし。

（十七）

融志高く氣嚴に性正しく情直なり。吏官之を贊して「懍懍焉、皜皜焉、それ琨玉秋霜と質を比するも可なり」といへるもの、まことに然り。その曹操を嘲罵し、翻弄する何ぞ痛快なる、何ぞ勁烈なる漢末清節の士多しその精氣鐘りて融となりしもの。而して融のこの氣骨はその詩文に發して豪氣直上、また東漢詞章纖弱の弊なからしめぬ。既に引用したる數章は之を證して餘あるにあらずや。たゞ故事を引く事多く、また句を疊ぬる多き當時の弊を脫する能はざりしと雖も、他人は故事字句に役せられ、融は故事字句を役す、その層疊夏雲の如き裡烈々たる意氣の日光の如きを見ずや。而して鬱勃たるその不平煥發せるその才思は往々嘲罵を逞しくし姦雄曹操を翫ぶこと小兒の如し。操の子丕深くその文辭を好み天下に募り、その文章を上るものあらば輒ち賞するに金帛を以てす。嘗て典論論文を作りて評して曰く、孔融體氣高妙人に過ぎたるものあり。然とも持論する能はず。理辭に勝たず。雜ゆるに嘲罵を以てする。に至るその善する所に及びては楊雄の儔なりと。理辭にに勝たずの一句宜しく、理情に勝たずと、改む可し。その著せしところの詩、頌文、論議、六言、策文、表、檄、教令、書記、范曄いふ凡そ二十五篇と。今傳ふるもの詩五首六言三首碑一篇論四篇議二篇書十六篇、對一篇、上書五篇表疏二篇あり。融性正情直なりと雖もまた寛容忌少なし士を好み喜びて後進を誘掖す。その太中大夫となるや、職閑なり、賓客日にその門に盈つ常に歎じて曰く坐上客恒に滿つ、尊中酒空からず、吾憂なしと。禁邕ともと善し。邕卒せし後ち虎賁の士の貌の邕に類せるものあり。融酒の酣なるごとに引きて與に同じく坐して曰く、老成人なしと雖も且典型ありと。融人の善を聞く、己より出でたるがごとし。言采るべきあらば、必す演へて之を成す。まのあたりその短を告げ、退きて所長を稱す。賢士を薦達し、奬進せしところ多し。知りて未だ言はざるを以て己の過となす。故に海內の英俊皆な之を信服す。郗慮またその推進せしところ、或はいふ、獻帝嘗て時に慮及び融を見る。融に問うて曰く、鴻豫何の優長するところあると。融曰く、與

に道を適くべし與に權すべからずと。慮笏を擧げて曰く、融昔北海に宰たり。政散し人流る。その權安ぞ在らんと。遂に互に長短し以て不穏に至ると。然ども慮もと小人、操の風旨を承けて融を斥け遂に之を死に致す。融は實にその剛直を以て死を招きしもの。初め京兆の人、脂習、融と善し毎にその剛直を戒む害せらるゝに及びて敢てその遺骸を收むるものなし。習往きて尸を撫して曰く、文舉我を舍てゝ死す、吾生を何にかせんと。操聞きて大に怒り、將に習を收へて之を殺さんとす。後ち赦さるゝを得て出づ。丕立ちて文帝となるや、習を以て欒布の節ありとし、中散太夫を加ふ。融の詩今傳はるもの五言五首六言三首のみ。戰亂の世悲聲多し。その離合作郡姓名字歌は魯國孔融文學六字を離合して詩をなしゝもの、その奇才見るべしと雖も、もと遊戲文字のみ。雜詩二首も觀るに足るその第一首自已の懷を述べて曰く、

巖巖鐘山首、赫赫炎天路。高明曜雲門、遠景灼寒素。
昂昂累世士、結根在所固。呂望老匹夫、苟爲因世故。
管仲小囚臣、獨能建功詐。人生有何常、但患年歲暮。
幸托不肖軀、且當猛虎步。安能苦一身、與世同擧厝。
由不愼小節、庸失笑我度。呂望悲不希、夷齊何足慕。

と。その第二首に至りて悲聲衰音、嗚咽するに足れり。曰く、

遠送新行客、歲暮乃來歸。入門望愛子、妻妾何人悲。
聞子不可見、日已潛光耀。孤墳在西北、常念君來遲。
褒裳上墟丘、但見蒿與薇。白骨歸黃泉、肌體乘塵飛。
生時不識父、死後知我誰。孤魂遊窮暮、飄颻安所依。
人生圖事息、爾死我念追。俛仰內傷心、不覺淚沾衣。
人生自有命、但恨生日希。

とまたその終に臨みて詩を作りて曰く、

言多全事敗、器漏苦不密。河潰蟻孔端、山壞由猿穴。
涓涓江漢流、天窓通冥室。讒邪害公正、浮雲翳白日。
靡辭無忠誠、草繁竟不實。人有兩三心、安能合爲一。
三人成市虎、浸潤解膠漆。生存多所慮、長寢萬事畢。

と。漢室壞亂人生を聊せず、當時の咏懷皆な悲壯。加ふるに老莊遺世的の念は既に前漢の時より已に人心に、浸漸し、今や世路の難に遭ひてこの念益〻長ず。遂に蕩として魏晉の思想界に流れたり。

（十八）

融と同時に稱衡なるものあり。字は正平、平原般の人なり。少して才辯あり。而して氣尙剛傲、好で時に矯し物を慢し、眼中世人を空しうす。たゞ孔融揚脩と善し。常に稱して曰く、大兒孔文擧、小兒揚德祖、餘子碌々數ふるに足るなきなりと。融また深くその才を愛す。衡始めて弱冠にして融年四十、遂に與に交友たり。上疏して之を薦む。

融既に衡の才を愛し、曹操に稱述す。操終にその狂簡に堪へず、その名の高きを以てまた之を殺す能はず。劉表に致す。表その才思を愛してその侮慢に忍ぶ能はず。送りて黃祖に與ふ。祖善く之を待せしと雖も、遂にその不遜を恚りて之を殺す。時に年二十六。その文章多く亡すといふ。祖の子射尤も衡によし。嘗て衡と俱に遊び、共に蔡邕の作りしところの碑文を讀む。射その辭を愛し、還て繕寫せざりしを恨む。衡曰く、吾一覽すと雖も猶ほ能く之を識る。唯その中石欽伊二字爲めに明ならざるのみと。因て書して之を出す。射使を馳せて碑を寫さしめ。還りて校せしに衡の書せしところの如し。歎伏せざるものなし、射時に大に賓客を會す。人の鸚鵡を獻ぜしものあり。射巵を衡に擧げて曰く、願くは先生之を賦し、以て嘉賓を娛ましめよと。衡筆を攬りて文を作り、點を加ふるなし。文選載するところの鸚鵡の賦は即ち是なり。辭采甚だ麗なり。鸚鵡に托して自ら述ぶ。豪懷放情頗る英偉の氣あり。また孔融の儔なり。

邊讓、字は文禮、陳留俊儀の人なり。少にして辯博、能く文を屬す。章華賦を作くる。范曄いふ、淫麗の辭多しと雖も而も之を終ゆるに正を以てす。亦た相如の風の如きなりと。躰は宋玉を摸し、事は靈王に托し、辭は伍擧の述ぶるに擬す。云はく楚の靈王既に雲夢の澤に遊び荆臺の上に息ふ。前方には淮の水あり、左には洞庭の波あり、右に彭蠡の懊を顧み、南に巫山の阿を眺め、目を延して望を廣くし、觀を騁せて日を終ふ。顧みて左史倚相に謂て曰く、盛なるかな、この樂、以て老を遺れて死を忘るべきなりと。是に於て章華の臺を作り、乾谿の室を築き、木土の技を窮め珍府

の實を盡くし、國を擧げて之を營む。數年にして迺ち成る。長夜の淫宴を設け、北里の新聲を作す。是に於て伍擧かの陳蔡の將に謀を生ぜんことを知り、迺ち斯賦を作り以て之を諷すと。是れ賦の起一段なり。陳蔡はさきに楚に滅せられたる二國の名なり。是より楚の祖宗の德を述べ說きて靈王に入り、章華宴樂の事に及ひ、

惠風春施、神馳電斷。華夏肅清、五服攸亂。且垂精於萬機兮、夕回輦於門館。設長夜之觀飲兮、展中情之讌婉。竭四海之妙珍兮、盡人生之秘玩。爾迺携窈窕從好仇、徑肉林登糟上。蘭肴山竦、椒酒淵流。激玄醴於清池兮、靡微風而行舟。登瑤臺以回望兮、冥彌日而消夏

と賦し、次て盛に歌舞淫樂の狀を敷張す、曰く

於是招宓妃、命湘娥。齊倡列、鄭女羅。揚激楚之清官兮、展新聲而長歌。繁手起於北里、妙舞麗於陽阿。金石類聚、絲竹群分。被輕袿、曳華文。羅衣飄颻、組綺繽紛。縱輕軀以迅赴、若孤鵠之失群。振華袂以透迤、若遊龍之登雲。於是歡娛既洽、長夜向半。琴瑟易調、繁手改彈。清聲發而響激、微音逝而流散。振弱支而紆繞兮、若綠繁之垂幹。忽飄颻以輕逝兮、似鸞飛於天漢。舞無常態、鼓無定節。尋聲響應、修短靡跌。長袖舊而生風、清氣激而繞結。爾迺妍媚遞進、巧弄相加。俯仰異容、忽兮神化。躰迅輕鴻、榮曜春華。進如浮雲、退如激波。雖復柳惠、能不咨嗟。於是天河既回、淫樂未終。清籥發微、激楚揚風。於是音氣發於絲竹兮、飛響軼於雪中。比目應節而雙躍兮、孤雌感聲而鳴雄。美繁手之輕妙兮、嘉新聲之彌隆。於是衆變已盡、群樂既考。歸乎生風之廣夏、修黃軒之要道。摧西子之弱腕兮、拔毛嬙之素肘。美儀操之姣麗兮、忽遺生而忘老。

と。是豈淫麗にあらずや。特に生風の廣夏に歸し、黃軒の要道を修むとより以下の如き何ぞ淫猥なるや。さきに宋玉好色を賦し、司馬相如美人を賦す。玉はその觀の美を說き、相如はその膚理の麗を敍す。然ともなほ忽として生を遣れて老を忘るゝ賦のことを口にせざりき。そのこれあるは後漢時の文士に始まる。さすがに讓はなほその痴態を賦せざりき。末段之を正に歸す、賦家の常手段、美文に於ても道德を忘れざる支那人の思想は十を勸むるもなほ一を諷せざるを得ざりし也。大將軍何進讓の才名をきゝて之を辟す。府掾孔融王郎並に刺侯を修む。識郎蔡邕深く之を敬し、盛にその逸才を揚げて何進にすゝめ、高任に處きてその才を展は

しむべしといふ。讓後ち高才を以て擢進屢〻遷り、官大守に至る。初平中王室大に亂れ、讓官を去て家に歸り、才氣を恃みて曹操に屈せず、輕侮の言多し。建安中その鄉人讓を操に薦ふるものあり。操群に告げ就て之を殺さしむ。文遺失多し。たゞその藻才は章華臺の賦に於て知りかたきにあらず。

東漢の言を立てしもの襲に桓譚王充王符の屬あり、而してその最も文辭に贍なるものを仲長統とす。統最も後れて出て、最も亂離の時に當る。故に其言最も激なり。辭贍にして言激なり、その文の光彩陸離たる、遙に前三者に勝るものある、何そ言を要せんや。史の傳ふるところによれば、統字は公理といひ、山陽高平の人なり。少にして學を好み、書記に博渉し、文辭に贍なり。年二十餘、青徐幷冀の間に遊學し、與に交り友とせしもの多く之を異とす。幷州の刺吏高幹は袁紹の甥なり。もと貴にして名あり。四方の遊士を招致し、士多く歸附す。統幹に過ぎる。幹善く待遇し、訪ふに當時の事を以てす。統幹に謂て曰く、君雄志ありて雄才なし、士を好みて人を擇ふ能はず、君の爲めに深く戒むる所以なりと。幹もと自ら多く其言を納れず。統遂に之を去る。幾もなく幹幷州を以て叛き、卒に敗に至る。幷冀の士皆之を以て統を異とす。統性倜儻にして直言を敢てし、小節を矜らず、默語常なし時或は之を狂生といふ。州郡命召するごとに輒ち疾と稱して就かず。常に以爲らく、凡そ帝王に遊ふもの、以て身を立て名を揚けんと欲するのみ。而して名常に存ぜず、人生滅し易し。優遊偃仰以て自ら娛むべし。居を清曠にトして以て其志を樂まんと欲し、之を論して曰く

使居有瓦田廣宅、背山臨流、溝池環市、竹木園布、場圃築前、果園樹後、舟車足以代步涉之難、便令足以息四躰之役、養親有衆珍之膳、妻孥無苦身之勞、良朋萃止、則陳酒肴、以娛之、嘉時吉日、則烹羔豚以奉之、瞬矐畦苑、遊獵平林、濯清水、追涼風、釣遊鯉、弋高鴻、諷於舞雩之下、詠歸高堂之下、安神閨房、思老子之玄虛、呼吸精和、求至人之彷彿、與達者數子、論道講書、俯仰二儀、錯綜人物、彈南風之雅操、發清商之妙曲、逍遙一世之上、睥睨天地之間、不受天地之責、永保性命之期、如是則可以凌霄漢、出宇宙之外矣、豈羨夫入帝王之門哉。

と古詩二篇を作くり、以てその志を見めす。辭に曰く

飛鳥遺跡、蟬蛻亡殼。騰蛇棄鱗、神龍喪角。至人能變、達士拔俗。

乘雲無轡、騁風無足。垂露成幃、張雷成幄。沆瀣當餐、九陽代燭。
恒星豔珠、朝霞潤玉。六合之內、恣心所欲。人事可遺、何爲局促。
大道雖夷、見幾者寡。任意無非、適物無可。古來繞繞、委曲如瑣。
百慮何爲、至要在我。寄愁天上、埋憂地下。叛散五經、滅棄風雅。
百家雜碎、請用從火。抗志山西、游心海左。元氣爲舟、微風爲柂。

飄々世を遺れ雲を凌くの風あるもの、是れ豈當時老莊の思想の已に支那人の腦裡に浸潤して、殆とその根帶となれるの跡を見るべし。時世の風雲人生を聊せず、遂に一般の思想をしてかゝる趣を帶せしむ。特に叛散五經滅棄風雅といへる已に魏晋曠達の習玄虛の風を開けるなり、佛教また之に乘してその勢を逞ふし、暗憺たる光景社會の全面を被ふに至れり。

荀彧統の名をきゝて之を奇とし、擧げて尚書郎となす。後ち丞相曹操の軍事に參し、古今及び時俗の行事を論說するごとに、恒に發憤歎息して昌言凡そ三十四篇十餘萬言を著す。獻帝遜位の年統卒す。時に年四十一。友人東海の繆襲常に稱す、統の方章、西京の董、賈、劉、楊を繼くに足ると。昌言傳らず、だゞ後漢書に略載せし理亂損益法誡の三篇及び諸書に引用せる片言隻語の存ずるのみ。然れどもその富贍華麗の辭を以て憤俗憂世の情を遣る。恰も疾風萬頃の波濤を激せしが如き觀あるは、此等殘篇によりて亦窺ひ知りかたからず。

荀子の子孫東漢に至りて名人多し。その十一世の孫荀悅高行博學を以て安帝の時に稱せらる。當時の名賢李固李膺皆な之を師宗す。その子八人儉緝靖燾汪爽肅專並に名稱あり、時人之を八龍といふ。儉の子に悅あり。立言者として修史家としてまた漢宋の大家なり。

史の傳ふるところによれば悅字は仲豫といふ。父儉早く卒し、悅年十二にして能く春秋を說く。家貧にして書なし、見るところの篇牘、一覽して多くは誦記す。性沈靜にして姿容美なり。尤も著述を好む。靈帝の時閹官權を用ひ士多く退身窮處す。悅乃ち疾に託して隱居す。時人之を識るなし、唯從弟彧特に稱敬す。初め鎭東將軍曹操の府に辟され、黃門侍郎に遷る。獻帝頗る文學を好む悅と彧と及ひ少府孔融と禁中に侍講し、旦夕談論す。秘書監侍中に遷る。時に政曹氏に移り、天子じを恭するのみ。悅志獻替に在り、而して謀用ゆる所なし。乃ち申鑒五篇を作り、

之を奏す。申鑒とは所謂『前鑒既明、後復申之』の謂にて名けしなり。范曄いふ『その論辨せしところ政軌を通見す』と。今其書を見るに、また頗る儒家道德の學說に資す。頗る獨得の見地あり、桓譚、王充、王符等に比して些の嫌色なし。悅嘗て孔子の辭遠而已矣といへるを解して以爲らく、聖人以てその隩を文るなり。五あり曰く玄、曰く妙、曰く包、曰く要、曰く文、幽深なる之を玄といふ、理微なる之を妙といふ、數博なる之を包といふ、辭約なる之を要といふ、章成る之を文といふ、聖人の文この五者に成ると。その文また之を冀及せんとしゝか、理は微なり、辭は約なり、而して多く熱情に驅られさる、温然玉のごときものあり。東漢の思索家中最も深邃なるものと稱して可なり。然れともまた先聖前賢の思想を折衷せるのみ。

當時靈帝典籍を好み常に班固の漢書の文繁にして省きかたきを以て、乃ち悅をして左氏傳躰に依り、以て漢紀三十篇を爲らしむ。尙書に詔して筆札を給せしむ。その序を讀めは以てその書の性質を知ると共にその文致を推するに足らんか曰く

昔在上聖、惟建皇極、經緯天地、觀象立法、乃作書契、以通宇宙、揚于王庭、厥用大焉。先生光演大業、肆于時夏、亦惟厥後、永世作典。夫立典有五志焉、一曰達道義、二曰章法式、三曰通古今、四曰著功勳、五曰表賢能。於是天人之際、事物之宜、粲然顯著、罔不備矣。世濟其軌、不損其業。損益盈虛、與時消息、臧否不同、其揆一也。漢四百有六載、撥亂反正、統武興文、永惟祖宗之洪業、思光啓守萬嗣。聖上穆然惟文之恤、瞻前顧後、是紹是繼、闡崇大猷、命立國典、於是綴敘舊書、以述漢紀。中興以前明主賢臣得失之軌、亦足以觀矣。

と。范曄、評して曰く、辭約事詳論辯多く美なりと。その書今傳らすと雖とも三國志等に之を引けるもの頗る多し。崇德正論及び諸論數十篇を著はしゝと傳ふ。今存するもの申鑒及び漢紀の殘篇のみ。年六十二にして建安十四年に卒す。

其四、小說の萠芽

(一)

支那に於て小說の目は始めて劉向及びその子歆の手に成りし七畧に見ゆ。七畧は當時に存せし群書を總へて輯畧、六藝畧、諸子畧、詩賦畧、兵書畧、術畧、方技畧となしゝものなり。その諸子畧中に諸子を十家に分ち、小說家をその一に列す。七畧今傳はらずと雖も漢書の藝文志はその要を摘みしものなり。然れともこゝに所謂

小說とは今の所謂小說と相同じきものにはあらず。漢志にいふ、小說家者流は蓋し稗官に出づ。街談巷語、道聽塗流せしものゝ造りしところなりと。稗とは細米なり。その細碎の義に取る。稗官は、卽ち小官にして、街談巷語を綴り、閭巷の風俗を王者に知らしむるもの、猶ほ採詩の官の各地の民謠を採りたらんかごとし。されば上世の小說は詩に國風あるかの如く政敎の一助たりしものゝ如し。今漢書に列する所謂小說なるものを見るに、その周代までのものには

伊尹說二十七篇　本註に曰く、その語淺薄にして依託せしものに似たりと。

鬻子說十九篇　本註に曰く、後世加へしところと。

周考七十六篇　本註に曰く、周事を考へしなりと。

青史子五十七篇　本註に曰く、古の史官の記事なりと。

師曠六篇　本註に曰く、春秋に見ゆ。その言淺薄もと此と同じ因て之に託せしに似たりと。

務成子十一篇　本註に曰く、堯問と稱す。古語にあらず。

宋子十八篇　本註に曰く、孫卿宋子を道ふ。その言黃老の意なりと。

天乙三篇　本註に曰く、天乙は湯をいふ。その言殷時のにあらず。皆な依託せしものなりと。

黃帝說四十篇　本註に曰く、迂誕依託なりと。

是なり。此等は皆な古聖往賢の言行に托し、所謂街談巷語に語りしを綴錄せしものなり。その書多くは戰國秦漢の際に世に出でしものなるべし。一種想像力の產物には相違なかるべきも、固より今の所謂小說の如きものにあらざるは明なり。今存するものなし。その他莊子に引ける、齊諧の怪を志せるといへる、はた禹の時益の筆せしものと稱せる山海經の怪誕なる神話多き、皆な支那人の所謂小說中に含まるべきものなり。而して明に武帝以後に成りし書にて漢志に見ゆるものには

封禪方說十八卷　本註に曰く、武帝の時と。

待詔臣饒心術二十五篇　本註に曰く、武帝の時と。師古曰く、劉向列錄にいふ、饒は齊の人なり、その時を知らず。武帝の時待詔書を作くり、名つけて心術といふと。

待詔臣安成未央術一篇　應邵曰く、道家なり。養生の事を好み、未央の術をなすと。

臣壽周紀七篇　本註に曰く、項國園の人宜帝の時と。

虞初周說九百四十二篇　本註に曰く、河南の人なり。武帝の時、方士を以て侍郎たり。黃車使者と號せりと。應邵曰く、その說周書を以て本となすと。師古曰く、史記にいふ、虞初は洛陽の人なりと。即ち張衡西京の賦に『小說九百、本自虞初』なるものなりと。

百家百三十九篇、

是なり。此等は皆な前漢時に成りしものなり。今存せずと雖も多く神仙家者流の手に出でしは明なり。而して後世最も注意を惹くものは虞初周說九百四十二篇なり。張衡西京の賦を作りて曰く、『匪惟翫好、迺有秘書。小說九百、本自虞初。從容之求、寔俟寔儲』と。當時神仙怪誕の事を談して帝王の翫樂に供せしことと見るべし。以て後世盛に起りし神仙小說の祖とすべし。胡應麟以爲らく、余恐る虞初の篇は即ち尙書而篇の則ち九百篇は九百事に過ぎず。計るに後世の卷を以てせば數十餘事に過ぎざるのみと。今存せず、知る可らざるのみ。彼また張衡が本と虞初よりすといへるに本づきて以爲らく、七略稱するところの小說これまさに後世と同しかるべく、方士務めて迂怪をなし、以て主心を惑はす。神異十州の祖襲自ら來るなりと。それまさに然るべきのみ。その他に關しては漢藝文志に所謂小說は街談巷語といふと雖も、實に後世の博物志怪等の書と迥に別なり。蓋しまた雜家者流の稍、錯ゆるに事を以てせしのみ。列せるところの伊尹一篇、黃帝一篇、成湯一篇の如き義を立て名を命ずる動もなれば聖哲に依る、豈後世の所謂小說ならんや。又た務成子一篇、註に堯問と稱し、宋子十八篇、註に黃老をいふといひ、臣饒二十五篇、註に心術をいふといひ、臣成一篇、註に養生をいふといふ。皆な後世に所謂小說にはあらざるなりと。然とも此等は大抵神仙方術の士の雜說を輯めたるものなるを記憶せざる可らず。彼また雜家流の稍、錯ゆる事を以てせしのみといふ。その事や、多くは空想の力に成る。而して特に神仙方術家者流の空想の力に成る。虞初はその中に就て最も後世の所謂小說に近きものゝみ。由來南人は空想の力に

富む。而して神仙方術家者流は南方老莊の思想に附會し、その寓言を事實として人間長生不死の欲望に投せしものにあらずや。支那小說はこゝに起因を有せしなり。余が先秦文學に於て莊子屈原に繫けて小說の胚胎を論ぜしの決して根據なきことにあらざるをみるべし、

その書存せずと雖も齊諧の怪を志せる、その目的は異なりと雖も莊列の書の事跡にその思想を寓せる、既に支那小說の濫觴と稱すべきものあり。而して南人の空想に富めるその思想を寓せし事蹟は多く上世の神話にしてまた上世地理の不明に原由して幾多の空想を逞しくし、所在神怪鬼物を擧げたるものあり。莊列屈原は前者の適例にして、今に傳はる山海經は後者の適にあらずや。而して戰國末より漸く思想缺乏の時代來るに及びて寓言はその寓せる思想を解せられずして、その事跡を事跡として信ぜられ、空想はやがて事實となりぬ。山東海上の方士こゝに於て老莊に附會して神仙不死蓬萊瀛州の說をなしぬ。秦に盛に漢に行はれ、敘事的文學の時代に逢着して遂に支那文學小說なる一新產物の萠芽を附與しぬ。げにや漢代はその學術は訓詁學にして、その文學は敘事文なり。その論策には多く事を敘して、自己の說を記せる、その歷史は支那文學に於ける空前絕後の偉觀なる、その韻文は事を鋪暢するてふ辭賦の盛に行はれ而して概して文章に多く故事を疊める、皆な當時の敘事的時代なるを證すべし。この時代に於て敘事詩たる小說の興起し來らんとする、何ぞ怪しむを要せんや。

（二）

漢志に見たる他漢代の小說とし今に存ずるもの十、その神仙に關するもの六、曰く、山海經、穆天子傳、海內十州記、神異經各一卷、別國洞冥記四卷、漢武內傳一卷是なり。山海經は禹或は益の書なりと傳ふ。殆と信すべからずと雖も、その文字の古奧なる周代の書なる疑なきものゝ如し。海內十州記、神異經は皆な山海經の亞流にして各方の地理を敘し、その神仙鬼物を擧ぐ。もと東方朔の著なりと稱す。漢志著錄せず、隨志始めて著錄す。且つや漢書その本傳に於て曰く、凡そ劉向錄せしところの朔の書具に是なり。世傳ふるところの他事皆な非なりと、劉向錄するところとは別錄載するところなり。この二書朔に出づとせば、この二書何ぞ錄せられさる。またその贊に於て曰く、朔の詼諧逢占射覆、その事浮淺、衆庶に行はれ、童兒牧豎

眩燿せさるなし、而して後世事を好むもの、因て奇言怪語を取りて之を朔に附著す。故に詳錄すと。この二書また後世事を好むものゝ附著せしものなるべし。而して七畧に著錄せざりしより見て余は斷して此二書の後漢以後に出でたるものなるを想はすんはあらず。洞冥記はた十州記、神異經と同類のものなり。郭憲の著なりといふ。憲は字を子文といひ、汝南の人、王莽及び光武に事へ、姓剛直、關東觥觥郭子横と稱せられしもの是なり。その出處大節具に本傳に見ゆ。范曄之を方術列傳に列す。冥洞とはこの書の序に所謂心を道敎に洞し、沈奥の跡をして昭然顯著ならしむるといへる是なり。多く神異經十州記を祖述して作れるもの。憲傳この書あるをいはず。且つ憲方術の列傳に列せらるゝと雖も學術あり、識見あり、且つその性質の剛直なる、他人の條嗤を嘗めて此の如き書を著すが如き人にあらず。殆ど依託なり。而して以上の三書皆な神仙の事を敘すとはいへ今の所謂小說と稱すべきにあらず。たゞその萠芽としてこゝに附記するのみ。

神怪に關する書にてやゝ小說の躰をなせしものを穆天子傳漢武內傳の二書とす。穆天子傳の著者明ならず。漢武內傳は固の作と稱するものあれども信すべからす。而して前四書を地理躰の書とせばこの二書は歷史躰の書といふべくたゞ神怪に關するに至りては一也穆天子傳の價値は尙山海經の價値の如き、その文字の古奥なる亦山海經に劣らず。而して山海經が古代の地理に多少の參照を價するか如く、穆天子傳また周代の歷史に多少の參照を價すべし。而して穆天子傳は周穆王の八駿に駕して西王母に會せしことを敘し漢武內傳また齋戒して西王母に見え神仙不死の術を受くるの狀を記す。西王母はもと國名なりしならん。穆王八駿に駕してその地に至りしとて何の怪むべきものなし。神仙の說起るに及びて西王母は神女となりぬ、而して武帝は齋戒して之を見るに西王母侍女を從へて雲霄より下り、之に神仙不老の術を語る。猶ほ山海經もと地理の書にして、神仙の說起るに及びて之に擬したる神異經、十州記、洞冥記の全然空想に出で神仙鬼物を記するの書となりしが如し。穆天子傳山海經とその中また神怪に類することあるにもせよ、上古蒙昧の世に當り、神怪を事實と信じて敘し、全く空想に出でたるのみにあらず。神異經、十州記、洞冥記はた漢武內傳は神怪を事實として信せざるにあらざるべしと雖も、事全く空想に出で且一世の好尙に投せしものなり。概して

いへば前二者や、事實を叙せしものにて後四者は大抵空想の書なり。從て前二者は小說に遠く後四者は小說に近く又後四者の中、神異、十州、洞冥の三者は、地理躰の書なれば、その躰裁性質最も今所謂小說と稱すべきものは漢武內傳の一なりとす。而して此く支那の小說は地理歷史の不明に本つきしと雖も小說否な寧ろ時に必要なる空想は(山海經をして神異、十州、洞冥たらしめ穆天子傳をして漢武內傳たらしめたる)南方思想か產物にして北方の地理歷史の不明はたゞその材を供せしに過ぎず。

支那人の所謂小說は巷談街說なり。西京雜記及び漢武故事の如き、隨筆樣の書も亦た含まる今の所謂小說にあらざるは固より論なし。西京雜記は多く武帝朝の雜事を記せり。或はいふ、この書もと劉歆の手に成りしもの、當時百卷あり班固漢書を作りて殆と全取す。晉に至りて葛洪固の錄せざりしところのものを抄集して命けて西京雜記といふと。塗上の說のみ。隋唐志倶に二卷を著す。隋志撰人の姓名を著せず。唐志葛洪撰と稱す。陳振孫いふ、洪博聞深學、江右絕倫なり。著書五百卷本傳具さにその目を著し、この書あるを聞かず。而して劉向劉歆父子もまた嘗て史を作りて世に傳へしを聞かず。班固をして因て述ぶるところあらしめば亦たまさに全く沒して著さゝるあるべからず。殆と疑ふべきあり。豈たゞ向歆傳ふるところにあらざるのみならずまた必ず洪の作にあらずと。段成式いふ、庾信詩を作くり、西京雜記の事を用ゆ。且つ追うて改めて曰く、是れ吳均の語、恐らくは用ゆるに足らじと。是より或は吳均の作となす。今知る可らざるのみ。漢武故事またこの種の書なり或は班固の撰となし、或は王儉の造となす。胡應麟曰く、その文を考ふるに頗る袁崗、孟堅に類せず、是れ六朝人の作なりと。まさに然るへし。然ともこの二書もと隨筆、今の所謂小說にはあらず。後世この種の文學頗る發達せしと雖も、深く注意するには價せじ。

たゞ神仙小說と共に深く考慮を要ずべきものは飛燕外傳一卷と、雜事秘辛一卷の二書とす。胡應麟は支那の所謂小說を分類して五とし、その一を志怪といひ、その二を傳奇といひ、神仙小說を志怪中に攝し、飛燕等凡て人間の情事を描きしものを傳奇中に攝したり。而して飛燕を以て實に傳奇の首なりとなす。陳氏いふ『漢河東の都尉伶玄撰す。自らいふ、楊雄と同時と。而して史に見るところなし』と。晁

氏いふ茂陵の卞理之を金縢漆櫃に藏す。王莽の亂のとき劉恭世に傳ふを得たり。晉のとき荀最校して上る。是も亦考ふべきなしと。想ふにその出處今知る可らず。令玄撰と稱すと雖も伶玄の何人なるやまた明ならず。その書前漢の成帝趙飛燕姉妹を寵し多慾遂に暴崩するに至りし情事を描きしものなり。筆頗る妖麗また艶事を寫すに堪へたり。この篇簡單と雖も以て前漢末內寵過盛なる宮中の狀態を見るに足るべく、また以て當時の風尙を察すべし。雜事秘辛また婦女に關せる點に於てや、此書と類を同じくす。撰者の名を闕く、たゞ後漢の桓帝大將軍乘高の女燮を以て后となさんと欲し、吳姁をして就てその身躰を檢せしめ、遂に冊立して后となすに至りし狀を載す。姁その燕處に入り髮を被り衣を解き、以て幽鳴聽くべきに至るまで兩人周旋の光景、眼見して耳聞たるが如し。且つや脂を築き玉を刻したらんが如き美人の裸躰、細視審察、摩畫し盡して餘蘊なし。文字はた奇艷、筆力實に驚くべきものあり。古來文字を以て娟麗を寫せるもの、莊姜を美せる衞詩、宋玉の好色の賦、司馬相如の美人の賦あり。衞詩も措き、宋玉以下皆な屈原の流なり。その君に比して美人を詠ぜしより、宋玉に至りて直ちに美人そのものを詠す。然れともなほ溫藉、その美を狀する眉目の間に留まる。司馬相如に至りて肌躰に及びまたその寢帳を狀す。やゝ穢褻となす、然ともなほ幽隱に及はず。一點實感を挑發するの意志なしと雖も、之れに至りしは秘辛を以て始となす。然ともこれ毫も人間委曲の情に關せず。たゞ裸躰の美人を描き、はた皇后冊立の典禮を敍せしに留まる。小說としての價値は遙に飛燕の下にあり。

太平の極は腐敗來る。前漢末に飛燕外傳出で後漢末に雜事秘辛出でたりとて何ぞ怪しむを要せん。然とも賦の戀哀を詠せしもの多く、また美人肉躰の美を狀せしもの多し。而して詩の簡なるに比して頗る委曲なり之を散文に轉せんは易易たる業ならんのみ。辭賦の盛に行はれたる漢代に於て人情小說の萌芽を生し、はた人間肉體の美を描くに至りし、また怪むを須ゐず。然とも當時その此の如きに至りしはなほ他の深き原因なくんばあらず。

支那最古の思索界は天地萬物の創造を說明するを以てその主題となしぬ。然る に北人實踐的の傾向は自ら天人行動の規則を闡明するに汲々とし、否な寧ろ人間行爲の規則を考察するを以て主要なる目的とし、物質開發の原理を探究せんとす

るもの漸く寂寞として聲なきに至りぬ余か言の誤ならざるを知らんと欲せは易の古なる部分と新なる部分とを比較し、はた易と其以後に成りし書とを比較せよ。孔子は單に易を以て人間當行の道を知るに資せしか如き傾向あるにあらずや。孟子は遂に之れを口にせざりしにあらずや。荀子に至りて全く之を信せざるに至りしにあらずや。たゞ幸に南方に情感に富むの民處り、山東に實利を重ずるの人集る。物質はたゞ此等の民人の思想に上りて漸く思想界に忘れざるを得たりき。南人は智と意とを離れて肉塊に返らんとせしにあらずや。天然の美、(即ち物質の美)はその文學によりて發揮せられしにあらずや。人間肉體の美(實感を超さる限りは)は線と色との配合にして天然の美とその實質に於て異なる所なし。南方の文學が北方文學の意志と情との衝突を寫すのみなるに異りて、天然の美を發揮せしはやがて放埒なる情欲を寫し、はた人間肉躰の美を描くに至りし所以にあらずや。而して南方老莊の思想を山東海上の方士に解釋せられて遂に神仙の說となり、養生不死の言となりまた鍊金の術となりぬ。鍊金の物質的なるはいはず、養生は肉身を養ふ所以にして、不死は肉身を死せさらしめたる所以のみ。漢代に於て思想の缺乏は多くかゝる物質的迷信を盛ならしめ、儒流の徒と雖も春秋災異の言をなし、一世蕩として物質的生活を脫すること能はざりき。災異とは人間の行爲によりて天然に物質的の報を受くるの謂にあらずや。此くして漢代の思想界に多少物質的の傾向を帶ばしめしと共に漢代の文學をして人間の放埒なる欲情を描かしめ、また人間肉躰の美を描かしめぬ。區區いふに足らざる作なりと雖も霜をふみて堅氷の至るを知る、飛燕外傳は前者を代表し、秘辛は後者を代表せり。この二篇は尤も恰當に物質的生活のみなる漢代の好尙を代表せるものにあらずや。而してこゝに於て余は志怪、傳奇の共に南方文學に胚胎せしものなるを斷言し得べしと信ず。

附言　講者支那行の事あり、遺憾ながらこゝにこの稿を中止す

支那文學史終

205171-000-8

62-350

支那文学史

藤田　豊八/述

[刊行不明]

EDV-0192